

## 『資本論』首節の一字：マルクスにおける過剰

福留，久大

<https://doi.org/10.15017/4491690>

---

出版情報：経済学研究. 54 (3), pp.63-71, 1988-08-10. 九州大学経済学会  
バージョン：  
権利関係：



# 『資本論』首節の一字

—マルクスにおける過剰—

福 留 久 大

## 目 次

1. マルクスの誤字ひとつ
2. 問題の個所に至る道筋
3. 問題の個所とその訂正
4. 問題の個所とその歴史
5. その他二三のことなど
6. 追記・何と言うべきか

## マルクスの誤字ひとつ

小さい、実に小さい確認を書き留めることにする。『資本論』第1巻第1篇第1章第1節に一個の誤記があるという実に小さいことなのである。その誤記も、notwendigeであるべきところが notwendigen となっている、つまり-eで終るべきところが-en となっている、というだけなのだから、これ以上小さいことはありえない、と言ってよいほどの小ささである。表題の「『資本論』首節の一字」は、この誤記された一字を指し、副題の「マルクスにおける過剰」は、削除されるべき-nを意味するわけである。小さいがゆえにマルクスをはじめとして誰もが看過しがちなのであろう。この際、強調しておくことは、無駄ではあるまい。とくに、この誤記が当初からあったものでなく、途中で混入して、幾度か繰り返された後、一度は訂正されながら、現在また誤った形で流布されていることを考えると、何十時間かを費してその誤りを指摘する

ことが必要でもあろう<sup>1)</sup>。

## 問題の個所に至る道筋

現行のマルクス・エンゲルス著作集第23巻 (Karl Marx-Friedrich Engels-Werke, Band 23) を成す『資本論』第1巻では、第1篇「商品と貨幣」第1章「商品」第1節「商品の二要因、使用価値と価値 (価値実体, 価値量)」は、49ページから55ページまでである。問題の誤記は、54ページに含まれているが、そこに至るまでのマルクスの論述の大略をみておくこととしたい。

この第1節の冒頭で、マルクスは、「資本主義的生産様式が支配的に行われている社会の富は、一つの『巨大な商品の集まり』として現われ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現われる。それゆえ、われわれの研究は、商品の分析から始まる。」と論述の出発点を明らかにし

1) それにしても大仰な表題をつけたものだと自分でも思わずにはいられない。「『資本論』首節の一語——マルクスにおける欠如」という次稿を準備しており、それとの形式的均衡の観点から、こういう表題を付した。

九州大学経済学部助手安田均、大学院経済学研究科博士課程鳥井鋼生の両君と、前者がフランス語版を、後者がドイツ語版を逐語訳するという作業を行っている過程で、気付いた事柄である。さらに語学的に不明な個所については九州大学教養部の同僚真田収一郎(ドイツ語, 現日本大学芸術学部)、高藤冬武(フランス語, 現九州大学言語文化部)の両氏の御教示を得た。以上の方々に謝意を表します。無論、なお残りの誤りの責任は筆者にある。

ている。そして、「商品の分析」は、第1節の表題に示されている順序で、まず「使用価値」の検討から始められる。それに50ページの前半までが充てられている。50ページの後半からは、「交換価値」の検討に転じている。第1節の表題にしたがえば、「使用価値」の検討の次には「価値」の検討が続くはずであるが、マルクスの論述に即して読むかぎりでは、「使用価値」の説明の最後の部分が、「われわれが考察しようとする社会形態にあっては、それは同時に素材的な担い手になっている——交換価値の。」と書かれていて、それを引き継いで、「交換価値」の説明が始められる。「交換価値は、まず第一に、ある一種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合として現われる。」という具合にである。

第1節の表題「使用価値と価値」に含まれる「価値」という言葉が初めて本文に登場するのは52ページの終りの部分である。そこに至るまで専ら「交換価値」の分析がなされている。「同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの同じものを表わしている」し、「交換価値は、ただそれとは区別される或る実質の表現様式、『現象形態』でしかありえない。」ということで、そこに含有される「一つの同じもの」「或る実質」が追求されることになる。「そこで商品体の使用価値を問題にしないことにすれば、商品体に残るものは、ただ労働生産物という属性だけである。」しかも使用価値を捨象するとき、「労働生産物に表わされている労働の有用性は消え去り」「これらの労働はもはや互いに区別されることなく、すべてことごとく同じ人間労働に、抽象的人間労働に、還元されているのである。」「そこで今度はこれらの労働生産物に残っているものを考察してみよう。それらに残っているものは、同じまぼろ

しのような対象性のほかにはなにもなく、無差別な人間労働の、すなわちその支出の形態にかかわりのない人間労働力の支出の、ただの凝固物のほかにはなにもない。これらのものが表わしているのは、ただその生産に人間労働力が支出されており、人間労働が積み上げられているということだけである。このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、これらのものは価値——商品価値なのである。」

こうして「価値」という言葉が登場するのであるが、その使用法をみると、「これらのものは価値——商品価値なのである。」という具合に、述語として用いられている。主語として使われているのではない。すなわち、この文章は、「価値」そのものを主題としたものではなく、したがって「価値」そのものの性質なり属性なりを説明するものではない。主語を成すのは、「これらのもの」であるが、それは文脈上、「無差別な人間労働力のただの凝固物」あるいは「共通な社会的実体の結晶」を指すと考えられるので、ここでの主題は「人間労働のただの凝固物」ないし「社会的実体の結晶」であると言えよう。第1節の表題に即して言えば「使用価値と価値（価値実体、価値量）」とあるように、「価値」についての説明は「価値そのもの」「価値自体」を素通りして、「価値実体」に吸収されてしまっていることになる。

再び第1節の表題に即して表現すれば、マルクスは、「価値実体」の説明に続いて「価値量」の説明に移る。53ページの次のような一節においてのことである。「ある使用価値または財貨が価値をもつのは、ただ抽象的人間労働がそれに対象化または物質化されているからでしかない。では、その価値の大きさはどのようにして計られるのか？ それに含まれている『価値を形

成する実体』の量，すなわち労働の量によってである。」と。そして，54ページに入って，問題の誤記を含む段落に移ることになる。

### 問題の個所とその訂正

岡崎次郎の翻訳によって示すと，問題の段落は次の通りである。「だから，ある使用価値の価値量を規定するものは，ただ，社会的に必要な労働の量，すなわち，その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間だけである。個々の商品は，ここでは一般に，それが属する種類の平均見本とみなされる。したがって，等しい大きさの労働量が含まれている諸商品，または同じ労働時間で生産されることのできる諸商品は，同じ価値量をもっているのである。一商品の価値と他の各商品の価値との比は，一方の商品の生産に必要な労働時間と他方の商品の生産に必要な労働時間との比に等しい。」

その原文は，54ページの最初の段落にあって，次の通りである<sup>2)</sup>。

Es its also nur das Quantum gesellschaftlich notwendiger Arbeit oder die zur Herstellung eines Gebrauchswerts gesellschaftlich notwendige Arbeitszeit, welche seine Wertgröße bestimmt. Die einzelne Ware gilt hier überhaupt als Durchschnittsexemplar ihrer Art. Waren, worin gleich große Arbeitsquanta enthalten sind oder die in derselben Arbeitszeit hergestellt werden können, haben daher dieselbe Wertgröße. Der Wert einer Ware verhält sich zum Wert jeder an-

dren Ware wie die zur Produktion der einen notwendigen Arbeitszeit zu der für die Produktion der andren notwendigen Arbeitszeit.

問題の誤記が含まれているのは，最後の一文「一商品の価値と他の各商品の価値との比は，一方の商品の生産に必要な労働時間と他方の商品の生産に必要な労働時間との比に等しい。」  
<Der Wert einer Ware verhält sich zum Wert jeder andren Ware wie die zur Produktion der einen notwendige Arbeitszeit zu der für die Produktion der andren notwendigen Arbeitszeit.> である。ここに「必要な労働時間」という語句が2回書かれているが，その最初のものが正しくは <notwendige Arbeitszeit> とあるべきなのに，<notwendigen Arbeitszeit> と誤記されているのである。

その誤記である理由を明らかにするために逐語訳を試みてみよう。

○——Der Wert einer Ware 一商品の価値は，zum Wert jeder andren Ware 各々の他の商品の価値に対して，die zur Produktion der einen notwendige Arbeitszeit 一方の生産のために必要な労働時間が，zu der für die Produktion der andren notwendigen Arbeitszeit 他方の生産のために必要な労働時間に対して，wie 同じように，verhält sich 比例する・関係する。

○——Der Wert einer Ware 一商品の価値は，verhält sich 比例する・関係する，zum Wert jeder andren Ware 各々の他の商品の価値に対して wie 同じように die zur Produktion der einen notwendige Arbeitszeit 一方の生産のために必要な労働時間が zu der für die Produktion der andren notwendigen Arbeitszeit 他方の生産のために必要な労働時間に対して。

2) Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band. [Karl Marx-Friedrich Engels-Werke. Bd. 23] Dietz Verlag, Berlin, 1962. (4. Auflage, 1969) S. 54.

問題の個所に焦点を絞ると、「一方の生産のために必要な労働時間が」〈die zur Produktion der einen notwendige Arbeitszeit〉という語句の核心を成すのは「労働時間が」〈die…Arbeitszeit〉というところであり、〈die……Arbeitszeit〉の中間の……部分、つまり〈zur Produktion der einen notwendige〉〈zur Produktion der einen [Ware] 一方の [商品の] 生産のために notwendige 必要な〉部分は、名詞「労働時間」〈Arbeitszeit〉に冠せられる形容句、いわゆる冠飾句である。したがって、〈die……Arbeitszeit〉は、単数女性主格の定冠詞〈die〉と単数女性主格の名詞〈Arbeitszeit〉とから成っており、〈die〉と〈Arbeitszeit〉の間の形容詞〈notwendige〉についてみると、「定冠詞+形容詞+名詞」の組み合わせにおける付加語形容詞の格変化表から単数女性主格に適応する-eの語尾を有することが明らかになる。

現行マルクス・エンゲルス著作集版『資本論』第1巻の54ページにある〈die zur Produktion der einen notwendigen Arbeitszeit〉については、〈die……notwendigen Arbeitszeit〉は成り立ちようがないのであり、〈notwendigen〉が〈notwendige〉に訂正されて、〈die……notwendige Arbeitszeit〉とならなければならない。〈die Arbeitszeit〉が単数形女性主格であるから、

- die notwendige Arbeitszeit (主格)
- der notwendigen Arbeitszeit (属格)
- der notwendigen Arbeitszeit (与格)
- die notwendige Arbeitszeit (対格)

この4変化のなかから〈die notwendige Arbeitszeit〉を選ぶほかない。〈Arbeitszeiten〉と複数形になっているならば、

- die notwendigen Arbeitszeiten (主格)
- der notwendigen Arbeitszeiten (属格)

a. 定冠詞+形容詞(語尾)+名詞

	m.	f.	n.	pl.
1. N.	der -e	die -e	das -e	die -en
2. G.	des -en	der -en	des -en	der -en
3. D.	dem -en	der -en	dem -en	den -en
4. A.	den -en	die -e	das -e	die -en

b. 不定冠詞+形容詞(語尾)+名詞

1. N.	ein -er	eine -e	ein -es	meine -en
2. G.	eines -en	einer -en	eines -en	meiner -en
3. D.	einem -en	einer -en	einem -en	meinen -en
4. A.	einen -en	eine -e	ein -es	meine -en

c. 形容詞(語尾)+名詞

1. N.	-er	-e	-es	-e
2. G.	-en	-er	-en	-er
3. D.	-em	-er	-em	-en
4. A.	-en	-e	-es	-e

- m. Maskulinum 男性 1. N. 第1格・主格・Nominativ
- f. Femininum 女性 2. G. 第2格・属格・Genitiv
- n. Neutrum 中性 3. D. 第3格・与格・Dativ
- pl. Plural 複数 4. A. 第4格・対格・Akkusativ

den notwendigen Arbeitszeiten (与格)

die notwendigen Arbeitszeiten (对格)

この4変化のなかから主格を示す〈die notwendigen Arbeitszeiten〉の可能性が存在するわけであるが、名詞は明らかに単数形であり、〈die notwendige Arbeitszeit〉しかありえないのである。

その後に出てくる〈zu der für die Produktion der andren notwendigen Arbeitzeit〉においては、前置詞 zu に支配されて〈der……notwendigen Arbeitszeit〉と〈der Arbeitzeit〉が単数女性与格になっているので

die notwendige Arbeitszeit (主格)

der notwendigen Arbeitszeit (属格)

der notwendigen Arbeitszeit (与格)

die notwendige Arbeitszeit (对格)

のなかから、〈der notwendigen Arbeitszeit〉を選んで間違いないことになる。

### 問題の個所とその歴史

#### (1)

この問題の個所は、『資本論』第1巻初版(1867年刊)においては、正しく〈die……notwendige Arbeitszeit〉と記されていたのである。初版5ページの該当個所を示すと次の通りである<sup>3)</sup>。

Es ist also nur das Quantum gesellschaftlich nothwendiger Arbeit oder die zur Herstellung eines Gebrauchswerths gesellschaftlich nothwendige Arbeitszeit, welche seine Werthgrösse bestimmt. Die einzelne Waare gilt hier überhaupt als Durchschnittsexem-

plar ihrer Art. Waaren, worin gleich grosse Arbeitsquanta enthalten sind, oder die in derselben Arbeitszeit hergestellt werden können, haben daher dieselbe Werthgrösse. Der Werth einer Waare verhält sich zum Werth jeder andern Waare, wie die zur Produktion der einen nothwendige Arbeitszeit zu der für die Produktion der andern nothwendigen Arbeitszeit.

〈die zur Produktion der einen nothwendige Arbeitszeit〉という個所をみてみよう。この初版においては、「商品」〈Ware〉を〈Waare〉と書き、「価値」〈Wert〉を〈Werth〉と書く表記法が採用されている。その流義で〈die……nothwendige Arbeitszeit〉と〈notwendige〉でなく〈nothwendige〉の表記がなされていて、今日の通常の表記法と異なるが、それは問題とはならないだろう。問題の形容詞語尾をみると、「定冠詞+形容詞+名詞」の組み合わせにおける単数女性主格に対応して〈die……e〉と正確な語尾変化を示しているのである。

このように、初版においては、問題の個所は正確に書き込まれていたのであり、誤字はなかったのである。

#### (2)

問題の個所に誤りが生ずるのは、『資本論』第1巻第2版(1872～3年)においてである。該当個所は第2版14ページであり、次の通りである<sup>4)</sup>。

Es ist also nur das Quantum gesellschaftlich nothwendiger Arbeit oder die zur Herstellung eines Gebrauchswerths gesells-

3) *Das Kapital, Kritik der politischen Oekonomie.* von Karl Marx. Erster Band. Hamburg, 1867. S. 5.

4) *Das Kapital, Kritik der politischen Oekonomie.* von Karl Marx. Erster Band. Zweite verbesserte Auflage. Hamburg, 1872. S. 14.

chaftlich nothwendige Arbeitszeit, welche seine Werthgrösse bestimmt. Die einzelne Waare gilt hier überhaupt als Durchschnittsexemplar ihrer Art. Waaren, worin gleich grosse Arbeitsquanta enthalten sind, oder die in derselben Arbeitszeit hergestellt werden können, haben daher dieselbe Werthgrösse. Der Werth einer Waare verhält sich zum Werth jeder andren Waare, wie die zur Produktion der einen nothwendigen Arbeitszeit zu der für die Produktion der andren nothwendigen Arbeitszeit.

〈die zur Produktion der einen nothwendigen Arbeitszeit〉という個所をみると、〈die……nothwendigen Arbeitszeit〉となっている。表記法は初版と共通であるが、形容詞語尾は〈-e〉でなく〈-en〉と誤った形が用いられている。

なおこの第1巻第2版は、1872年から73年にかけて分冊形式で刊行された後、1873年に単行本として再刊行されたものである。マルクスは、チャールズ・ダーウィンやハーバート・スペンサーにこの1873年刊行の第2版『資本論』を贈呈している。そういう経緯に照してみると、マルクス自身の見落しによって生じた誤字であると判断できるだろう。

(3)

第2版において生じた誤字は、マルクスの死後エンゲルスの編集で刊行された第3版(1883年刊)において訂正されることなく、そのまま引き継がれている。『資本論』第1巻第3版6ページの該当個所は、次の通りである<sup>5)</sup>。

5) *Das Kapital, Kritik der politischen Oekonomie.* von Karl Marx. Erster Band. Dritte vermehrte Auflage. Hamburg. 1883. S. 6.

Es ist also nur das Quantum gesellschaftlich nothwendiger Arbeit oder die zur Herstellung eines Gebrauchswerths gesellschaftlich nothwendige Arbeitszeit, welche seine Werthgrösse bestimmt. Die einzelne Waare gilt hier überhaupt als Durchschnittsexemplar ihrer Art. Waaren, worin gleich grosse Arbeitsquanta enthalten sind, oder die in derselben Arbeitszeit hergestellt werden können, haben daher dieselbe Werthgrösse. Der Werth einer Waare verhält sich zum Werth jeder andren Waare, wie die zur Produktion der einen nothwendigen Arbeitszeit zu der für die Production der andren nothwendigen Arbeitszeit.

(4)

以下、各版の該当個所を列挙する。

第4版(1890年刊エンゲルス編集)6ページ<sup>6)</sup>。

Es ist also nur das Quantum gesellschaftlich nothwendiger Arbeit oder die zur Herstellung eines Gebrauchswerths gesellschaftlich nothwendige Arbeitszeit, welche seine Werthgrösse bestimmt. Die einzelne Waare gilt hier überhaupt als Durchschnittsexemplar ihrer Art. Waaren, worin gleich grosse Arbeitsquanta enthalten sind, oder die in derselben Arbeitszeit hergestellt werden können, haben daher dieselbe Werthgrösse. Der Werth einer Waare verhält sich zum Werth jeder andren Waare, wie die zur Produktion

6) *Das Kapital, Kritik der politischen Oekonomie.* von Karl Marx. Erster Band. Vierte Auflage. Herausgegeben von Friedrich Engels. Hamburg. 1890. S. 6.

der einen nothwendigen Arbeitszeit zu der für die Produktion der andren nothwendigen Arbeitszeit.

カウツキー版（1914年刊）7ページ<sup>7)</sup>。

Es ist also nur das Quantum gesellschaftlich notwendiger Arbeit oder die zur Herstellung eines Gebrauchswertes gesellschaftlich notwendige Arbeitszeit, welche seine Wertgröße bestimmt. Die einzelne Ware gilt hier überhaupt als Durchschnittsexemplar ihrer Art. Waren, worin gleich große Arbeitsquanta enthalten sind, oder die in derselben Arbeitszeit hergestellt werden können, haben daher dieselbe Wertgröße. Der Wert einer Ware verhält sich zum Wert jeder andren Ware, wie die zur Produktion der einen notwendigen Arbeitszeit zu der für die Produktion der andern notwendigen Arbeitszeit.

この版から表記法が現在のものに変えられるが、形容詞語尾の誤りは訂正されないままである。

(5)

アドラツキー版（1932年刊）44ページ<sup>8)</sup>。

Es ist also nur das *Quantum gesellschaftlich notwendiger Arbeit* oder die zur Herstellung eines Gebrauchswertes gesellschaftlich notwendige Arbeitszeit, welche seine Wertgröße bestimmt. Die einzelne Ware gilt hier überhaupt als Durchschnittsexemplar ihrer Art. Waren, worin gleich große Arbeitsquanta enthalten

sind, oder die *in derselben Arbeitszeit* hergestellt werden können, haben daher *dieselbe Wertgröße*. Der Wert einer Ware verhält sich zum Wert jeder andren Ware, wie die zur Produktion der einen notwendige Arbeitszeit zu der für die Produktion der andren notwendigen Arbeitszeit.

このアドラツキー版において、ようやく形容詞語尾が〈die……notwendige Arbeitszeit〉と訂正された。このアドラツキー版は、モスクワに場所を移して、その地のマルクス・エンゲルス・レーニン研究所の力を結集して所長アドラツキーの指揮の下に編集されたものである。ドイツの地を離れて新たな態勢で組織的な校訂作業が行われたと推定されるわけであるが、その効能が〈die……notwendige Arbeitszeit〉という正しい形容詞語尾となって現われたといえよう。

(6)

しかしながら、不思議にも、第2次大戦を経て、再びドイツに帰ってベルリンのディーツ社から1947年に刊行された『資本論』第1巻は、「この版は、モスクワのマルクス・エンゲルス・レーニン研究所によって1932年に編集されたものである。研究所による序文を削除した以外は、何ら変更は加えられていない。」〈Die vorliegende Ausgabe wurde besorgt von Marx-Engels-Lenin-Institut, Moskau, 1932. Sie ist, unter Fortlassung der Einleitung des Instituts, ein unveränderter Nachdruck.〉と、表題頁裏面に明記されているにもかかわらず、問題の個所で1932年刊のアドラツキー版と異なり、再び誤りを再現させているのである。この所謂ディーツ版44ページでは、問題の個所はこうなっている<sup>9)</sup>。

7) *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie.* von Karl Marx. Erster Band. Volksausgabe. Herausgegeben von Karl Kautsky, 1914. S. 7.

8) Karl Marx, *Das Kapital. Kritik Der Politischen Ökonomie.* Herausgegeben von Friedrich Engels, Besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Institut. Moskau, 1932, S. 44.

Es ist also nur das *Quantum gesellschaftlich notwendiger Arbeit* oder die zur *Herstellung eines Gebrauchswerts gesellschaftlich notwendige Arbeitszeit* welche seine *Wertgröße* bestimmt. Die einzelne Ware gilt hier überhaupt als *Durchschnittsexemplar ihrer Art. Waren, worin gleich große Arbeitsquanta enthalten sind, oder die in derselben Arbeitszeit hergestellt werden können, haben daher dieselbe Wertgröße.* Der Wert einer Ware verhält sich zum Wert jeder anderen Ware, wie die zur Produktion der einen notwendigen Arbeitszeit zu der für die Produktion der anderen notwendigen Arbeitszeit.

アドラツキー版と同じであるという言明にもかかわらず、この文章に明らかな通り〈die…… notwendigen Arbeitszeit〉と誤った形容詞語尾が認められるのである。ここから、前出のように現行のマルクス・エンゲルス著作集第23巻『資本論』第1巻第1篇第1章第1節にも誤字が再現することとなったのである。

### その他二三のことなど

このほかに第1篇第1章第1節において同様に形容詞語尾に疑問を感じて調べた結果、マルクスの筆の誤りではないと判明した個所がふたつある。著作集版『資本論』で示すと、いずれも52ページに含まれている。

ひとつは、「使用価値としては、諸商品はなによりもまずいろいろに違った質である、交換価値としては、諸商品はいろいろに違った量でしかありえないのであり、したがって一分子の使

用価値も含んではないのである。」という文中の「違った質」〈*verschiedner Qualität*〉と「違った量」〈*verschiedner Quantität*〉という個所である。

ふたつは、それに続く段落のなかに登場する。「それは、もはや机や家や糸やその他の有用物ではない。」という文中の「有用物」〈*ein nützlich Ding*〉という個所である。原文は次の通り。

Als Gebrauchswerte sind die Waren vor allem verschiedner Qualität, als Tauschwerte können sie nur verschiedner Quantität sein, enthalten also kein Atom Gebrauchswert.

Sieht man nun vom Gebrauchswert der Warenkörper ab, so bleibt ihnen nur noch eine Eigenschaft, die von Arbeitsprodukten. Jedoch ist uns auch das Arbeitsprodukt bereits in der Hand verwandelt. Abstrahieren wir von seinem Gebrauchswert, so abstrahieren wir auch von den körperlichen Bestandteilen und Formen, die es zum Gebrauchswert machen. Es ist nicht länger Tisch oder Haus oder Garn oder sonst ein nützlich Ding. Alle seine sinnlichen Beschaffenheiten sind ausgelöscht. Es ist auch nicht länger das Produkt der Tischlerarbeit oder der Bauarbeit oder der Spinnarbeit oder sonst einer bestimmten produktiven Arbeit.

第一の部分では、「違った質」〈*verschiedner Qualität*〉、「違った量」〈*verschiedner Quantität*〉と、単数女性属格（2格）になっているのが、〈*verschiedne Qualität*〉、〈*verschiedne Quantität*〉と主格（1格）に訂正されるべきではないか、と迷った。結局のところ、「余は意見を異にする者なり。」〈*Ich bin anderer Meinung.*〉「この語は男性である」〈*Dieses Wort ist*

9) Karl Marx, *Das Kapital, Kritik Der Politischen Ökonomie*, Dietz Verlag, Berlin 1947. S. 44.

männlichen Geschlechts.〉のように、属性・性質・状態を示すときに属格（2格）を用いることがあり、「叙述の2格」と呼ばれるという事情がわかって、マルクスの誤りでないことが明らかになった。

第二の部分では、「有用物」〈ein nützlich Ding〉について、「不定冠詞＋形容詞＋名詞」の組み合わせにおいて、名詞が単数中性主格（1格）であるから、形容詞の語尾が〈ein nützlich Ding〉と訂正されるべきではないか、と疑った。これも問合わせの結果、「大器晩成」〈Gut Ding will Weile〉のように、中性主格（1格）・対格（4格）のばあい、とくに俚諺・俗語において、形容詞が変化しないことがあるという事情がわかって、マルクスの誤りでないと判明した。

いまひとつ、動詞の変化で迷った個所がある。著作集版『資本論』53ページの「では、その価値の大きさはどのようにして計られるのか？」という部分である。原文は次の通りである。

Ein Gebrauchswert oder Gut hat also nur einen Wert, weil abstrakt menschliche Arbeit in ihm vergegenständlicht oder materialisiert ist. Wie nun die Größe seines Werts messen? Durch das Quantum der in ihm enthaltenen wertbildenden Substanz, der Arbeit. Die Quantität der Arbeit selbst mißt sich an ihrer Zeitdauer, und die Arbeitszeit besitzt wieder ihren Maßstab an bestimmten Zeiteilen, wie Stunde, Tag usw.

主語は「その価値の大きさ」〈die Größe seines Werts〉で3人称であるから、動詞は、

〈mißt〉となるのではないかと疑問を持った。だが、この部分は不定詞による省略的構文であること、通常は怒り・驚きなどの表現に用いられるが、ここでは単なる簡潔さをねらった表現と考えられることから、マルクスの誤りではないと判明した。（1988. 5. 10）

#### 追記・何と言うべきか

何と言うべきか、言葉もない。以上を書いた後、念のためマルクス・エンゲルス著作集第23巻の新しい版を取り寄せてみた。問題の個所は以下の通り正確に訂正されていたのである<sup>10)</sup>。Es ist also nur das Quantum gesellschaftlich notwendiger Arbeit oder die zur Herstellung eines Gebrauchswerts gesellschaftlich notwendige Arbeitszeit, welche seine Wertgröße bestimmt. Die einzelne Ware gilt hier überhaupt als Durchschnittsexemplar ihrer Art. Waren, worin gleich große Arbeitsquanta enthalten sind oder die in derselben Arbeitszeit hergestellt werden können, haben daher dieselbe Wertgröße. Der Wert einer Ware verhält sich zum Wert jeder andren Ware wie die zur Produktion der einen notwendige Arbeitszeit zu der für die Produktion der andren notwendigen Arbeitszeit.

校訂作業はこつこつと続けられていたのだった。筆者が小賢しく駄文を草するまでもなかったのである。（1988. 6. 26）

10) Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band. [Karl Marx-Friedrich Engels-Werke, Bd. 23] Dietz Verlag, Berlin, 1962. (16. Auflage, 1986) S. 54.